



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成19年3月25日
通巻51号

第11回 日本下水道文化研究会 総会のお知らせ

日本下水道文化研究会では平成19年度総会(第11回)を下記のとおり開催いたします。平成18年度は地球環境基金の助成金を得て行われてきた海外技術協力事業の最終年度を終え、今後の新たな展望が開かれるとともに、し尿・下水分科会、関西支部の活動も非常に活発で、それぞれ出版事業や水に関連するNGOとのネットワークづくりなどの成果があがっています。こうしたなかで、本会の運営状況は、収入面、活動の担い手など懸案の課題は解決を見ないまま推移しております。一方、平成19年度は、東京で下水道文化研究発表会を開催しますので、企画段階から多くの会員の皆様の参加を期待しております。

第9回以降の総会同様、記念講演は行わず、本総会を分科会、支部の活動成果を会員の皆様へ伝達する場として企画いたします。諸活動の成果をお伝えし、忌憚のないご意見をいただき、それぞれの活動へ反映していきたいと考えています。

また、総会終了後、本会稲場紀久雄評議員から、今後のわが国の水管理制度について講演をいただきます。万障お繰り合わせのうえご参集のほど、お願い申し上げます。

なお、やむを得ず参加いただけない会員の皆様は、委任状の提出をお願いします。4月下旬には総会議案書をお送りする予定です。よろしくお願いたします。

記

日時 平成19年5月19日(土) 13:30～15:00

場所 日本水道会館7階会議室

千代田区九段南4-8-9

プログラム(予定)

第1部 分科会・支部活動

第2部 総会(15時頃総会閉会)

講演

「進めよう、水制度改革～水道行政三分割から50年～」

大阪経済大学教授 稲場紀久雄氏

講演主旨: 水道行政三分割から50年、中央省庁再編成、道州制などの動きのなか、我が国水管理は、制度、組織両面で改革を提案しなければならない時節にあっている。会員の皆さんとともにこの問題について考えたい。

※講演終了後懇親会を開催します。

第38回定例研究会 「水道分野の国際協力をめぐって」を聞いて

㈱データ設計 広島 基

平成19年3月2日、日本下水道文化研究会運営委員の佐藤八雷氏よりお誘いを受け、同会定例研究会に初めて参加させていただきました。講演は「水道分野の国際協力をめぐって」と題され、国立保健医療科学院の国包先生が講演をされ、厚生労働省の山村水道課長、東京都下水道局の前田局長を始めとする各界の代表的な方々が数多く参加されていました。

講演では、開発途上国の水道の現状、今後の国際協力の基本方針・戦略、ネパールやバングラデシュの事例紹介、第4回世界水フォーラムでのカンボジアとセネガルの発表内容など、世界の水道事情の現状と水道分野の国際協力に関する最新情報をご提供いただきました。中でも、バングラデシュのヒ素汚染の現状と厚生労働省や国際厚生事業団、国際協力機構など我が国の諸機関の取り組み、アジアヒ素ネットワークの活動の紹介は大変印象深い内容でした。自然起因による地下水のヒ素汚染の現実が有り、これに表流水より衛生面で安全である地下水を求めたことが組み合わされた悲劇に驚きました。しかし、これを克服するためには地下水のろ過が効果的であること、電気が無い土地で費用もかけられないことから、簡易で低コストのろ過施設が設置されていることなどを知り、様々な工夫と努力が続けられていることに感銘いたしました。

私たちがあたりまえに享受している水道の有難さを改めて思い知らされたと共に、衛生工学に携わる者としては開発途上国での技術協力と現実的な施設計画の有り方を考えさせられる内容でした。

講演の後の質問では、水道事情の改善による乳児死亡率の低下、人口増加が食料やエネルギー不足に及ぼす影響などが議論され、人類の持続的発展のためには様々な課題を並行的に解決せざるを得ない場合があることを感じました。

このような貴重なお話を聞かせていただける機会をご提供いただきました日本下水道文化研究会の皆様には感謝いたします。次の機会にも是非参加させていただき、いろいろなお話をお聞きしたいと思っております。



講演される国包章一氏

2月のバングラデシュから

本会会員 高村 哲

朝早くから北西へ向かってジョムナ川を渡る唯一の長大なジョムナ橋を渡ると、5メートルも下がっていた周囲の田畑は徐々に上がってきて、緑の地平線を形成する豊かな台地となった。知らず知らずに周囲の建物はレンガから、土をつき固めた分厚い壁の家となり、一頭立ての牛車は、仏陀の時代から変わらない白い牛が2頭で引く大八車状のものに変わった。激しい揺れの中、ようやく昼を過ぎてしばらくたって、疲れ果てたころ NAOGAON 県の Niamatpur 村に入り、協力してやっている事務所の人たちや村の方々に手厚い食事と共に大歓迎されたことは、もう30分も前のことだ。

私たちは早く私たちの作ってきたエコサントイレと兄弟となる新しい50基近いトイレ群を見たかった。形だけ真似をしたものではないだろうか、安いだけの人々が使いたいと思えないようなものではないだろうか、基本的な私たちの考え方をしっかり理解してくれているだろうか、と、すぐ近くだと言われてから30分も車で走って、なおひなびてくる村の家々の土の壁の美しさに打たれながら、大揺れに揺れる車の中で不安にさいなまれていた。

そこは突然やってきた。道は人であふれていた。その中にほこりにまみれた車が止まり、ドアを開けて降り立つと、たくさんの人々に取り巻かれ、案内されて現場に近づくにつれて数百人の人の群れもいっせいに動く。ようやく人の波が切れたときにそのエコサントイレが見えた。

ほっとした。スリナガルでやってきたものと同じ考えのものだ。夢中になって覗いたりもぐったりしつつ各部を詳しく見て回る。こうやって、村の人たちが少しでも安く自由に勝手に作ってあげばいいのだ。こういうものを自分たちで作りたいと思えばいいのだ。そう思いながら振り返る

と無数の笑顔が取り巻いていた。急にうれしさがこみ上げてきて、「みんなで写真を撮ろう」と言ってしまった。いっせいに、にぎやかに集まり始めた。荷車の車輪の上に登り、「みんなで何かを叫ぼう」というと、スペース代表のアジャールが人波の中で「・・・と叫ぼう！」と呼びかけているのが見える。みんなの笑顔がいっせいにはじけ、無数の手が空を突き上げて叫び声と共に喜びに満ちた。背後には JADE の名も書かれたトイレが誇らしげだ。それはどうやっても小さなカメラには入りきれないものだったが、この場にいる人の心にはまっすぐに滑り込み共有できるものだった。

そのまま用意してくれていた意見を交わす場に移って椅子やござに座った人だけを数えると160人ほどであったが、取り巻く人も座れた人もみんな笑顔で実にうれしそ



村の集会場に集まった人たち



Niamatpur村のエコサントイレの前に集まった村の人たち

うなのだ。もちろん話も活発に飛び交った。この日は日が暮れてもまだほかのトイレを見て回った。片道500km疲れ果てたが来てよかった。

この数日前、コミラの BARD で二日間にわたって行った発表や会議も次官クラスから各地の専門家、スリナガルのおばちゃんまで80人近い出席者が本当に活発に話していた。私たちも、前日に BARD に着いて、打ち合わせをしてすぐに現場へ出てほぼ全部のト

イレを回り、すべての便槽をあけてもらって確認しているので自信を持って対応できた。実際にしっかり見つめてウンチを握ってきたという自信は実に安心感を与える。

ところで BARD でおこなったエコサントイレのナショナルワークショップでの初日のプレゼンテーションは酒井さんと高橋さんだけだと理解していたので急にこちらもやることになってうろたえたが、保坂さんと急遽プレゼン用資料をまとめてどうにかなった。話の後、データをくださいとってたくさんの人が USB メモリーを持ってきてそんな作業も忙しく話は活発であったが、重大な問題が生じたというわけでもない。話は、国内の8万7千の村の一つ一つ、このタイプのトイレを作っていこうという動きがどうも実際に進みそうだということが収穫だろうか。女性と子供、老人への配慮も求められた。

そんな話を聞きながら、1日目に JICA へ行ったときに担当の方が話されていた「こちらではパイロットプロジェクトは必ず成功するんです。でも普及するものはほとんどないのです」と話していた言葉が頭をよぎった。そうなのだ、今回の私たちのバングラ行きはそのために来たようなものなのだ。私たちが数十、数百のトイレを作ってもそれだけでは何にもならない。この国の人たちが自分のお金を使ってでもどうしても欲しいと思えるようにならなければいけないのだ。そのためのコストを下げる試み、デザインが必要だし、急激に広がっていく場合にしっかりした考え方、使い方、形だけではなく、そのような形にならないものが間違わずに広がっていくかどうかを鍵なのだと思うている。

私たちは夢を持っている、このトイレは汚れた環境をクリーンな環境に変えるばかりではなく、良い土を作っていくという二つの面がある。この二つは村々にとって非常に大きな力を与える。飲み水がきれいになる、病気が減る、よい土により作物ができる。協力していっしょにやっているスペースの代表アジャールさんは、私たちのトイレから持ってきた腐葉土のような土を手に乗せて、目を輝かせてスタッフに演説をしたことがある。「これが私たちの夢を実現するのだ。バングラから貧困をなくすことができるのだ。この仕組みによって、良い水が使えるようになれば、子供たちが死んだり病気になることが減る、そうすれば病気にお金をかけることも減り、それを教育にかけられる、教育を受けた子供たちは仕事の幅が増え、生活が豊かになり、徐々に貧困から離れることができるようになる。これが私たちの夢を実現していく、これが夢なのだ」と話していた。Asia Arsenic Network の対馬さんは「有機農業を進めるために使えるのではないかと熱を持ってお話になり、缶ビールを10本も差し出してくれた！感動した。

そうなのだ。みんな夢がある。遠い夢と知り、確実にそこに近づいて行くことに多大の労力が必要だと知っているから、みんなそれぞれの持ち

場でぼろぼろになるまで働いている。酒井さん、高橋さんは、ダッカやコミラで怒り、脅し、妥協し、約束させ、メモをさせ、笑いあって、確実に一步一步を歩むために身をすり減らしているし、それに加えてお金を管理している高橋さんは領収書1枚に至るまで、神経を使い、対立し、恫喝し、怒り、疲れ果てているのに、夜になっても飲む酒もないのだ。

便所を作っているだけではないのだ、私たちはたくさんの夢を育てている。

今回の最後は私たちが作ったスリナガルの便所を訪ね、ウンチがさらさらの土になっているのを見てきた。灰と太陽だけでこれができるなんて信じられないくらいだが、実際目の前にある。お皿でさらさらとすくって、畑に使う注意を何箇所かで実演してきた。ほっておくとそのまま適当に撒いてしまいそうで、安全になるまでに飛散させないように、畝を作ってその谷間に入れ、土をかぶせるという考えを実演して説明する。しかしそれを見ている人たちは実に積極的なのだ。男たちが適当に撒こうとしたりすると女たちからがっかりとやり込められている。私たちとしたら危険性を回避する方法しか今は言えないが、あれだけ目を輝かせて、理解し、質問し、議論しあっていればこの先きちんとやっていけそうであれよかった。

その日はそのまま夜中の2時の飛行機で日本へ。何しろそれが一番安いのだという。無駄な金など使いたくないのだ。何時間も空港でじりじりしながら待つ。何しろ酒のない国だ。やっとチェックインすると同時に酒の売り場に殺到し、一本のウイスキーを買ってみんなで飲んだ。疲れきっているところに飲んだものだから3時間後、飛行機に乗るころにはみんな半分しか飲んでいないのにもう目をつぶるとすぐに意識がなくなる状態。よく働いたなーと言いつつ、全身の疲労感と同時に意識がなくなった。

土産を買う暇もなかったから自宅の駅前でケーキを買って帰宅。しかしみんなよく働く人たちだとつくづく思う。JADE の活動はそんな人がやっている以上先は明るいと感じた。



乾燥便の使い方を実演（スリナガル郡のBasailbogh村で）

3月のバングラデシュから

本会運営委員 高橋 邦夫

3月のバングラデシュは3度目の体験となるが、乾期の終盤ともあって、空気は暑く乾燥している。毎日続く晴天は小さな放射冷却現象を引き起こしているものと見え、朝方には薄っすらとした霧がたちこめる。これに排気ガスと粉塵が混合され、吸い込む空気は劣悪である。今年のバングラデシュは、昨年の雨期の降雨量が例年の2/3とのことで、渇水の様相を呈している。多くの住民の生活用水をまかなう溜池の水位は例年に無く低下しており、その分、水質の悪化は著しい。

今回のバングラ訪問の目的は、JFGE 助成活動の年度末の最終確認と、折り良くダッカで開催された、次の2つの学会への参加である。

“International Conference on Water and Flood Management, 12-14 March 2007, Dhaka, organized by Institute of Water and Flood Management, Bangladesh University of Engineering and Technology (BUET)”と“1st Annual Conference on Regional Science, 16-17 March 2007, Dhaka, organized by Bangladesh Regional Science Association”である。

2つの学会では、酒井代表がそれぞれ“Issues on Safe Water Supply and Sanitation and Local People's Welfare in a Rural Bangladesh”、“Challenges to Overcome the Problems Related with Sanitation in Rural Area of Bangladesh”を発表した。

学会参加は有意義なものであった。特にこの国の水問題

に関する研究レベルの一端を垣間見る事が出来たこと、近い将来、共同研究を意図した何人かの知己を得ることが出来たことである。

両学会とも残念ながら盛況とは言い難かったが、気がついたことを列挙しよう。まず、学会とはいえ、データを取ってグラフ化することが分析とされ、また、コンテンツだけを並べたものや、参考文献だけのオリジナリティの無いものが目に付いたことである。こうした論文？は日本の土木学会の論文審査基準からすれば、全て却下である。また、学会の参加費は、外国人は法外に高い。要するに学会の開催は、外国の資金援助を前提としたものである。

そして、驚いたもう一つの現実、後者の会場となったBUETでは、トイレとエレベーターは教員用とその他の区別がなされていたことである。教員は学生があつて成り立つものであり、学生は教員あつて成り立つものである。

さらに、我々のセッションの司会者は、セッションの終わる頃ようやく現われた。セッションのトップバッターである酒井代表が遅らせるわけには行かないと言ったところ、幸い次のセッションの司会役であるラジャヒ大学の教授が、臨機応変に司会者役を買って出てくれ、スケジュールどおりにセッションは進んだ。大幅に遅れてきた本来の司会者からは釈明の発言は一言も無く、こういう学歴、経歴だけ立派な中身の無い人物が、学問・研究を支配しているのであらう。思い出したくない不愉快な現実の一端である。

ボリビアの高原都市コチャバンバからの報告

本会運営委員 佐藤 八雷

南米のほぼ中間に位置するボリビアに5週間滞在してJICAの水道施設改善基本設計調査に携わりました。国土の面積は日本の3倍もありますが、人口は870万人です。活動拠点はコチャバンバという、標高2600mを越えるボリビア第3の都市で、人口が56万人もいます。平地が少なく、山間には貧しいインディオが住み付いています。

JICAの仕事は、起伏の激しい山間地の住民に水道水を毎日しかも24時間連続して配ることです。これまでは、水道組合の給水車が週に何回か道端に置いてあるドラム缶に水を配っていたのです。ここは降水量が年間700mmしかなく、水源が乏しい上に平地が少ない山間に、あまり多くの人々が住みついてしまったというのが私の感想です。平地は2600mでインディオが住み着いている山間部は2800m、実に200mもの高低差があり、ポンプの問題、水圧の問題等解決しなければならないことが沢山ありました。

これまでに体験したことの無い気候です。今は夏で、雲ひとつ無い空から太陽の日差しをあびると、30度を越える暑さで、まさに夏ですが、朝夕は、または雨が降ると晩秋の気候になり、10度前後まで下がります。人々は分厚い

セーターにコートあるいはキルティングかジャンパーを着込んで出勤しますが、昼間はTシャツか半袖姿になります。1日の温度の差が20度近くもあり、朝何を着て行って良いのか迷います。

南米人らしく陽気で素直で、仕事をしていて楽しいのですが、チャランポランでいい加減で、限られた期間で要請された成果を挙げなければならない我々にとっては少々困ります。右の写真は我々が借りている建築中のビルです。このビル



窓ガラスが入った3階が事務所

の3階が短期に提供されたオフィスです。この国は建築途中のビルに賃貸で入居させます。つまり、出来上がっている階の部屋から順次入居させて、賃料を取るというわけです。日本の常識はここでは通用しません。

コチャバンバは美しい公園の街でもあります。途上国には珍しく多くの公園がいつも美しく整備されています。農

産物の集積地とも言われ、国中の野菜や果物がここから出荷されます。フルーツの美味しいところとも言われていますが、私の感想はそれほどでもありません。日本ほど世界中の美味を輸送と保存のテクノロジーを駆使して集積している国はないと、改めて思いました。

旧事九官録 巻1

シベリア抑留の事

本会運営委員 森田英樹

この度、「ふくりゅう」誌において、暫くの間トイレや尿尿などのお話しを中心に連載させていただくこととなりました。連載にあたりまして、タイトルを『旧事九官録』といたしました。なんのこともやわからぬタイトルですが、単純に『旧事』は昔の事。『九官』とは人まねが得意な九官鳥の事でありませぬ。これからの私の拙い連載は、先人の業績を単に九官鳥のようにオウム返しに呟くだけで、なんら斬新なものではありません。また、九官鳥は、意味もわからず人まねをしているだけです。この連載もそのようにご覧いただければ、見当違いの呟き、無意味な呟きなどを不快に感じることもなく、お聞き流しいただけることでしょうか。しかし、九官鳥の人まねも、時として心を和ませたり、ハッとさせられたりするものです。この拙い連載も、そんな九官鳥のように愛して頂ければと願いタイトルといたしました。

さて、今回のお話しです。私の小学校3年から6年までの担任であったK先生は、戦後シベリアでの抑留を経験されておりました。そんなK先生の体験談の中に「シベリアはとにかく寒い、外で立ち小便をすると小便がすぐに凍り、アーチ状の氷小便柱が地面から伸びてきて、オチンチンの所まで来るんだ。それを時々足で蹴飛ばし、折りなが

ら小便をするんだよ」、「ウンコをすると、落ちるまでに凍る。だからウンコがでるとカチン、コロコロと音がするんだ」子供心に、ホントかな?いや、ウソだろう?と考えては、その光景を幾度も想像し、そんな話に、なぜかワクワクしている小学生でした。またこんな話もありました。「抑留生活で一番つらかったのは、便所の汲み取りをする時だ、カチンカチンに凍っている氷ウンコの塊を、ツルハシやハンマーで砕きながら屋外に捨てに行く。ここまでは何でもないが、作業が終わって部屋に戻った後が大変。頭から爪先まで氷ウンコが付いていて、それが溶けだし、ものすごい匂いになるんだ」このお話しは妙に納得をし、今だに頭の中にはその匂いが焼き付いております。

まさか、小学3年生の時、私がトイレ人生を歩むことになるとは想像だにしませんでした。しかし、もしかするとこの頃からその性格の片鱗はあったのかもしれない。K先生とは小学校卒業以来お会いすることはありませんでした。「氷小便柱」や「カチンコロコロ」のお話しがホントであったのか。トイレ話の続編がもっとあるのか?是非、お会いしてお聞きしたい所です。とは言ってみたものの、K先生の授業の事はすっかり忘れ、こんな糞尿譚ばかりが頭に残っているようでは、とても合わせる顔もありません。

2007年多摩川源流まつりのご案内

風薫る五月、今年もその4日に恒例の多摩川源流まつりが奥多摩の山梨県小菅村主催により行われます。日本下水文化研究会では、下記の要領で参加いたします。

こどもの日となる翌5日は、都民の水道水源である笠取山の水干(みずひ)まで、宿でいただいたおにぎりをもって、片道2時間の軽いハイキングを予定しています(ただし雨天中止、有志のみ)。老いも若きもふるってご参加ください。スニーカーで十分です。

見所；中川神社、長作観音<小菅村に入る山道の峠>、白糸の滝、雄滝、郷土太鼓、お松焚き、打ち上げ花火<漆黒の闇に映え美の極致>、小菅の湯、おいらん淵、水干<源流の一滴>

あじ；山菜、刺身コンニャク、山女、手打ちそば
記

日時 平成19年5月4日～5日(1泊2日)

集合 JR八王子駅北口タクシー乗り場、4日午前10時

解散 同所、5日午後6時(予定)

宿 小菅村 山水館(やまみずかん) TEL 0428-87-0533

費用 男性 9,000円、女性 8,000円、子供 5,000円
(1泊3食、交通費、飲み物とも)

※お問い合わせ、申込みは 藤森正法まで(自宅 TEL & FAX:03-3801-4848、携帯 090-4132-5501)、4月20日締切り、携帯メール fujimoriseihou@docomo.ne.jp

※ご要望などもお申し付けください。



バン格拉デシュ・エコトイレ普及活動便り

前号では6ヶ月間も訪問期間が空いたと書きましたが、その後2月と3月に訪問しました。その模様は、高村、高橋両氏に執筆してもらいましたが、ここでは3年間の地球環境基金からの助成期間を終えるにあたり、これまでの活動経験から学んだこと、そしてこれからの展望についてまとめておきたいと思えます。学んだ教訓は以下の通りです。

- 実際にトイレを使う人たちに必要性を認識してもらうことが大切であり、オーナー意識につながる。そしてオーナー意識無しには、無用の長物になりかねない。
- パートナー組織とは粘り強く付き合う必要があり、互いの足りない部分を補えあえるような関係が望ましい。決して万全を期待したりてはいけな。一方、関係の継続が困難という決断は速やかに行う必要がある。
- 被援助国内でできることは、国内の人材、資源を用いて行うべきである。そして足りない部分で援助する。
- 受け入れ側の熱意と援助側、すなわち我々が新たな発見をする喜びを感じる事が継続の要件になる。
- 人の言説を信じて活動の幅を狭めることはない。この例としては、「ムスリムの人たちは人糞を使わない」や「ピットラトリン以外は認めないという『政府方針』」などがあげられる。これらについて本当かどうか確かめずに退いていたら、今の状況はない。

しかし、このようなことを確かめたことが、バングラデシュの国全体のポリシーまでを考えるきっかけにもなりました。当初、予想していなかったことです。それは、今普及しているトイレの普及を第1段階と考え、我々のエコサン・トイレの導入は次のステップへの準備だということです。2月に行われたワークショップでこうした内容の基

調講演をさせてもらい、すぐに政策に反映されるかどうかは別として、エコサンの位置付けとして、理解は得られたと考えています。

エコサンの導入は、この国の主産業である農業基盤としての「土づくり」、そして安全な飲み水の供給に深い関係があります。プロジェクト開始当初、農村の人たちが、化学肥料で疲弊した土壌を改善するために人糞に目をつけていたことを知って、わが意を得たりという思いでしたが、土と見分けのつかない乾燥便が実際にできるという事実が広く知られるにつれて、土づくりの必要性への認識が広まっているように思います。人口過密な農業国において、「土」は食糧確保の基盤であり最優先で保全しなければならない資源です。この資源保全策として、これまで捨てられてきたし尿を活かすことは、それだけでは十分でないとしても取り組む価値のあることです。また、洪水の国であるバングラデシュは同時に水資源に恵まれていない国であることは、今回の乾期訪問ではっきりしました。人口の多い農業国ですから、人のし尿と肥料は表流水の汚染源となり、安全な飲料水源を脅かします。それに加えて、地下水ヒ素汚染です。表流水の安全を保全することは命に関わる問題です。

衛生の第2ステップでは、排泄の場を提供するためのトイレから、土壌再生のためのトイレ、貴重な水源を保全するためのトイレへと転換し、水と食の持続可能な基盤に寄与するものとしていく必要があります。このような点に関して、少なくとも近い将来には合意が得られる可能性を感じた2月のワークショップであり、この3年間の活動でした。さらに、3月訪問時に参加した学会では、そうしたことをすでに考えている「同志」も少なくないことが確かめられ、これからの希望が大いに持てたことが収穫でした。

運営委員会・事務局より

- ふくりゅう 50号で昨年行われたバルトン生誕150年記念事業の報告書の残部をお頒けしますとお知らせしてしまいましたが、同記念事業企画実行委員会ではそのような意図はないことでしたので、電子メールでふくりゅうを送付している会員へは訂正版を送らせていただき、ホームページにも訂正版を掲載いたしました。全会員に再度訂正のお知らせをさせていただきとともに、改めまして不手際をお詫びいたします。
- 本会報とともに、平成18年度の機関誌「下水文化研究18」を同封いたしました。刊行を急ぐという以前から目指してまいりましたが、今回も諸般の事情から年度末となってしまいました。最近の講演では図版や写真が多く、それらの著作権の関係から、講演内容を的確に伝えられる講演録の作成が難しくなってきたこともあげられます。
- 近年の決算において、期待通りに会費納入がないため、次年度の予算作成が難しくなっている現実があります。本会活動の基盤は皆様の会費であるということを今一度認識していただき、総会議案書とともに請求させていただき会費の速やかな納入を切にお願いいたします。
- 図書の注文に対する対応が遅いとお叱りを受けることがあります。何分限られた陣容での対応、複数の運営委員が同時に海外へ出かけていることも少なくないため、一般の出版社のように行かないことをご理解いただきたいと思います。次年度は何らかの対策を講じたいと思えます。

ふくりゅう 通巻51号おもな目次

第11回総会案内	1
「水道分野における国際協力をめぐって」を聞いて	1
2月のバングラデシュ	2
3月のバングラデシュから	4
ポリビアの高原都市コチャバンバからの報告	4
旧事九官録巻1 シベリヤ抑留の事	5
2007多摩川源流まつりご案内	5

編集後記 本年度5号目のふくりゅうです。2007年度は、隔月刊を目指すとともに、運営委員以外からの投稿をもっと増やすことによって、情報交換の場という会報本来の目的を果たせるよう工夫していきたいと思えます。(酒井 彰)

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>